

失われた「厳父」と「慈母」

父という字は、古い字形はで、手に杖を持った形を表わしたものです。杖は、人を指図したり教導する者が手にするもので、いわば「権威の象徴」です。従って、父とは、「一家を率い、家族を教え導く家長」を表わした字です。

父はまた、“政”や“教”の。“女”とも同じ構造です。「国民を正義に教え導く」ことが“政”であり、「わが子を教え導く」ことが“教”で、その「教え導く」という意味は“女”の部分にあるのです。

今、教育と言え、すぐに学校とか教師とかを思い浮かべますが、教育とは、本来、親の子に対する本能的な行為であって、そのことを漢字の成り立ちがよく表わしています。

この人生において、長い経験を通して、どうすればよいか、どうすればいけないか、いろいろと理解していきます。そういう経験から得た知恵を一つ一つわが子に伝え、少しでも失敗の少ない人生が送れるようにとする“親としての本能的な行為”が教育なのです。

親の知恵をわが子に授けることから、人間の知恵を専門に扱う学者にこれを委任することが効率の良い教育と考えられるようになって、今の学校教育の形に発展してきましたが、やはり真の教育は親のものだと私は思います。その理由はあとで述べます。

さて、論語に「父、父たり。子、子たり」とあります。それは、「父なる者が、父としてよく一家を統率し、家族を教導する権威と責任を全うして、初めて、その子も立派な子になる」ということを表わしたものだと思えます。

これにくらべて、今の“父”はどうでしょうか。まず次の、中学生が作った狂歌をお読み下さい。

家庭とは父厳しくて母優し それでいいのだから違うが

(中二男)

人並に叱られてみたい時もある 俺の親爺は俺がこわいのか

(中二男)

心からすがりつこうとする時に いつも父さん逃げてしまうよ

(中一女)

昔から、「厳父・慈母」と言って、この二つの言葉が示すように、厳しい父と優しい母と、本質の異なる両親があって家庭はうまく成り立っているのです。今のように、母親以上に甘い父親では、両親の存在する意味がないではありませんか。

ところで、どうして今の父親はこんなにも甘いだけの“だめな父親”になってしまったのでしょうか。

まず第一に、「敗戦による自信の喪失が、親としての教育の拠り所にも及んで、わが子をどのように教育して行ったらよいのか全くわからなくなってしまった」ということが考えられます。「斧の柄を作る時には、それを作るのに現に使っているその斧が、何よりも良い手本である」という昔の諺が示すように、それまで自分が受けて来て、すっかりわが身に滲みついていることを、そのままわが子にしつけて行けば良かったのに、「それが政戦の原因なのだ。だから、そういう考え方を一日も早く改めなければいけない」と言われますと、だれでもただ当惑するよりほかはありませんでした。

それで、それまでの厳しいしつけ教育に代って、新しく登場した考

え方は、その反動として「親の考えを子どもに押し付けてはいけない。子どもの意思を尊重し、子どもの望むままに伸び伸びと育ててやるのがよいのだ」という放任主義でした。

この放任主義は、自信を失った親たち、どう教育して行ったらよいのかわからない親たちにとって、この上もない魅力的な方法でした。どんなに自信のない親でも、これなら、自信？ をもって行なえるのですから。

しかし、放任が教育であるはずはなく、放任しておいて子どもが立派に育つわけがありません。そこで、あわてて教育入門書をあれこれとかじっては行き当たりばったりやってみますが、これでは子どもはますますだめになるばかりです。

こういう例が、このごろ非常に多くなっています。昭和 53 年 4 月まで私が勤めていた研究所(大東文化大学幼少教育研究所)のようところは、全国にも至って数が少なく、そのせいか、教育相談に訪れる親が多く、それには以上のような親が非常に多いことがわかりました。